

司馬遼太郎と宗教から

親鸞は法然の弟子にあたり、もともと浄土真宗は浄土宗から生まれた。(親鸞聖人の絵像は叡山の荒法師のような、それよりもっと凄みがある感じです)全般にいかつく、西洋人のようにも見える顔で、彫が深く、目がぎよろりとしている。

(武蔵坊弁慶など、手もなくねじ伏せられそうなきさまじい顔をしていて、師匠とは、ずいぶん違います)

同じ念仏の行者なのに、どうしてこう違うのか。親鸞を理解する助けとして、司馬さんはロシアの作家トルストイを引き合いに出している。『戦争と平和』などを書いたトルストイは熱心なロシア正教の信者だった。キリスト教の世界では天国への狭き門をくぐるため、「禁欲」が重要な戒律になる。しかしトルストイは気の毒なくらいに性欲が強かった人で、これでは天国には行けないと悩み続ける生涯を送ったという。(似た人が親鸞聖人ですね)

親鸞もまた禁欲について悩んだ。自分のような煩惱に苦しむ者は、浄土に行けないのではないかと苦しんだ。トルストイも親鸞も悩みは同じで、(岩の牢屋に閉じこめられた囚人)のようなものだと、司馬さんはいう。岩の牢屋で親鸞があがき、血みどろになって脱出しようとしたとき、法然が現れた。「そこに窓があるじゃあないか。そこから出ていったらよろしい」と、さらりと言われた。ああそうかと、そこから出て行った世界が浄土宗の世界です。

法然、親鸞、トルストイ。いかにも司馬さんらしいレトリックで、浄土宗の世界が開かれていく。司馬さんは浄土宗、浄土真宗についてこんな話もしている。(同じ経典で同じ思想から出た宗教ですが、違いがあるとしたら、それは法然上人の円い人柄と、親鸞聖人が秘めた厳しい人柄の違いだと思う)

宗祖の人柄、個性は込みついてとれないものと、司馬さんはいう。法然について、知恩院のベテラン僧侶に聞いた。「いまは人生80年といいますが、そのうち90年といい始めますよ。こんな物があふれている時代なのに、いまだに俺が神や仏やいう人があとを絶たない。騙される人も相変わらずいる。いまほど宗教が必要な時代はないかもしれません。電話相談をしてくれる人は多いですよ」

以前から相談や悩みの電話は多く、知恩院では、僧侶が相手をする「お坊さんと話してみませんか？」というイベントもあるそうだ。

僧侶の話のリズムは楽しく、引き込まれる。法然さんゆかりのリズムだろうか。

「法然さんのリズムは本当にいいですね。簡潔明瞭だし、ポイントも見事に押さえる。「眠たくてどうにもお念仏が申せないんです。どうしたらいいでしょうか」と聞かれると、「いや、寝たらいいやん」そんなリズムに親鸞さんも魅かれて、救われたんだと思う。

法然は美作(岡山)の武士の子に生まれ、9歳で父親を失って出家、若くして比叡山に登った。『知恵第一』と呼ばれ、動乱の時代に修行がマッチしないと山を下りた。『南無阿弥陀仏と唱え、阿弥陀仏にすべてをお任せすれば浄土に行つて仏になれますよ、救われますよ』と説いて回ると信者が増えた。当時叡山の僧侶は求道の気分が薄れ、政争を事とし、暴徒になり、争鬭に明け暮れた。

(法然上人が悟られたのは、お釈迦さんはどういう人で、お釈迦さんに近づくにはどうすればいいかということでした。それが浄土宗ですね。現世利益を求めるものではありません)また、親鸞は「煩惱に苦しんでいた親鸞にすれば、藁にもすがりたい思いだったとおもいま

すね。手探りの状態だけど、みんなを救いたいという気持ちは法然さんと同じだった。あつてみると、法然さんがおっしゃる。『実は私も煩惱だらけですよ、あなたと一緒にですよ。ただ私は阿弥陀さまの南無阿弥陀仏を唱えろという言葉を広めているだけで、あなたも一緒にどうですか』と、ただその言葉だけやったと思っています」

連合軍総司令部（GHQ）の中佐から「親鸞という十三世紀の僧は、悪人をほめたたえて、悪人のほうが天国へ行けると説いたのは、本当かね」「善人なほもつて往生をとぐ。いはんや悪人をや」という、『歎異抄』の有名な説を聞き、「善人でさえ浄土に往生することができのです。ましてや悪人は言うまでもありません」という意味はなかなか通じない。仏教の場合、悪人とは罪人を指す言葉ではない。悪の要素である利己心を持ち、貪欲であり、愚味な人間といった意味になる。

親鸞は生涯を通じて自分の有り様を問い続けた。『歎異抄』には、同朋（念仏の仲間）からの悩みに答える場面が描かれており、そこに親鸞の特性を見ることができている。「本当に南無阿弥陀仏を称えれば、お浄土へ往生できるのでしょうか」この問いには、親鸞は次のように言い放っている。「往生できるかどうか、仏さまでもない自分にはわからない。ただ私は法然上人から「間違いなく往生できる」と教えていただいた。その道を行くのみである。もともと地獄行きの身である私には、この教え以外に歩める道はないのだ」また、『歎異抄』では、親鸞より30歳も若い著者の唯円が「念仏を称えても、心からの喜びが湧かないのです」と相談する。これに対し「そうか唯円も同じか。ワシもいくらお念仏しても、ちつともうれしくないんだよ」と親鸞は告白している。

室町時代ごろから、寺領を持たない寺が葬式を始めるようになる。（日本で土俗化した仏教にあつては、死骸をホトケとしたものですから、哲学的思考は一切吹きとび、否も応もなしに、死体そのものが宗教になってしまったのです）

こうして「ホトケ」さんの世界、葬式仏教の世界がひらけていく。（死ねばお坊さんが来てお経をあげてくれる。きつとすばらしいお浄土へゆけるでしょう、ハイ行けます。証明不要です、そう言わんばかりにしてお坊さんがあわただしくお経をあげてゆく）葬式の後は、お墓にはいることになる。これも本来の仏教にはない思想だった。釈迦にも釈迦の弟子たちにも本来、墓はない。（仏教には、死後、地下で生活するというような思想はありません）

江戸初期までの庶民の葬送は本来の仏教にふさわしいものだった。（多くは石を置くだけで、そこに名も刻みませんでした。まして葬儀にあたって死体をホトケとして礼拝するということもありませんでした）

現代の墓、高い値段の戒名や仏壇、高額なお布施を、もし釈迦が見たら、何の宗教なのかと思うだろう。矛盾をはらみつつ、現代まで仏教はその歴史を刻んできた。

（私は、死にあたって仏教の僧侶に立ち会ってもらおうとは思いません。死後、お経をよんでもらおうとも思いません）という司馬さんだったがお墓もあるし、葬式もあった。「ぼくは死ぬ一秒前に『南無阿弥陀仏』で救われるつもりです」といつてもいる。

浄土真宗をはじめた親鸞（1173年～1263年）にしても墓は要らないといっていた。その教えも、人生同様、さまざま矛盾をはらんでいる。親鸞の人生には実に迷いが多い。

旧仏教による弾圧で越後（新潟）へ流罪となったのは35歳のときだった。讃岐（香川）に流された師の法然との違いは、恵信尼という妻をめとったことだろう。

西本願寺の如来寺（大阪府池田市）住職で、相愛大学教授でもある釈徹宗さん（55）はいう。「法然は生涯独身です。法然に傾倒していた親鸞なので、もし師匠が反対すれば結婚していなかったでしょう。法然思想の軸は念仏で、家族をもつかどうかは本質的な問題ではありません。念仏をみんな称えやすければ家族をもつたらいいい。ひとりが良ければひとり進めばいい。ただし、親鸞は家族をもつたがゆえに、さまざまに悩むことになりました。」4年後に罪が許されても京都には戻っていない。長野、栃木などを経て常陸国（茨城）の稲田を中心に20年あまり暮らしている。「そのことが多分人生で一番充実し、安定していた。仲間もたくさんできて、『親鸞系グループ』は5万、10万といった説もあります。ところが60歳を過ぎ、突然多くの支持者を捨てて京都に戻ってしまふ。京都で住まいを転々としています。親鸞自身が着地を拒否するようなところがあつたのかもしれない」

釈さんは、司馬さんの親鸞への深い思いを感じていたという。

「まず、親鸞が念仏の仲間たちに対し、なにひとつ隠していない点ですね。これまでの宗教の伝統とはずいぶん違います。宗教的な奥義など何もないというオープンな姿勢に感銘を受けられていたようです。さらに、『歎異抄』には『この道を奉らんとも捨てんともめいめいの計らいなり』という言葉があります。私は師匠の法然が示してくれた念仏一途の道を行く、あなたたちはこの道でも自分自身で決めなさいという。ここに恐らく相当共感されておられたんじゃないかというふうに思いますね。講演で何度もお話しされています」

親鸞は仲間たちに厳しく「個人」を要求している。「親鸞は弟子一人ももたず候ふ（この親鸞は、一人の弟子ももっていません）」という有名な言葉もある。

「仏様の目から見れば、人に優劣はない。私もあなたたちも同じように仏様にお任せする道歩んでいるのだから、師匠とか弟子ということはないという。さらに『歎異抄』には親鸞が弟子の唯円に私のことを信じているかと問う場面があります。『信じています』という唯円に、信じるなら浄土に往生するため、『千人ころしてんや』と問いかける。関西弁で千人殺せという。唯円が一人も殺せませんと答えると、信じてはいてもできないことがあると新欄は言う。善き心があるから殺さないわけではなく、状況によって何をしでかすかわからない、それがわれわれの實在なんだと説いています」

親鸞は晩年、正しい教えを広めるために、関東に息子の善鸞を送っている。「その息子がカルト教団の教祖のようになったため、親鸞は勘当しています。すでに80歳を超える自分の生活を支えていた息子で、生活手段にも困るような状態だが、断固たる処置をとる強靱な意思がありました」そうかと思えば、最後の手紙では逆の素顔を見せている。

「息子と末娘らしき名前をあげ、『みなさんぜひ面倒をみてあげてください』とたのんでいます。自分はもう88歳で長くは生きられないし、何もできないので哀れに思ってお世話してくれと。いわゆる高僧としてはとても惨めな手紙だともいえるでしょう。家族をもつたものだからこそその苦悩です。その意味では、まさに世俗の中を生き抜いた人です」

親鸞は自分の死体を「鴨川に捨てて魚のえさにしてくれ」と遺言し、90歳で亡くなっている。しかし末娘の覚信尼が「大谷廟堂」（現在の知恩院の三門の北あたり）を建立。親鸞のひ孫、覚如の時代にそれが本願寺になり、室町時代の蓮如によって大教団になっていく。

「親鸞の教えを学び、親鸞を説く道歩むのは大変です。なるほどそうかとわかったつもりでも、親鸞は着地をさせてくれない。ずっと宙ぶりにされてしんどいときもあります。それもまた、親鸞の魅力ですね」

親鸞没後、浄土真宗は振るわなくなっていく。ついには京都の本願寺も天台宗の末寺になっていったという。そんな状況のなか、蓮如は生まれる。長男だが、母が正妻ではない事情もあり、正式な後継者になるのは43歳だった。

遅咲きの蓮如は、親鸞の教えのエッセンスを大胆に取捨選択、広めることに成功する。

(このため親鸞の思想がやや世俗化し、大衆を把握するうえで都合のいいような形に味付けされた。後世、親鸞を尊敬する中で、蓮如をさほどに愛さない人もある。しかし蓮如が出現しなかつたら、親鸞もその思想も、おそらく忘れられてしまったに相違ない)

もつとも蓮如はいきなり成功したわけではない。蓮如の教えが広まることを危惧した比叡山延暦寺は蓮如を「仏敵」とし、本願寺を壊してしまふ。京都を離れた蓮如は近江の金森、堅田、大津に拠点を移す。迫害を受けつつも信者は増え続け、やがて蓮如は北陸へ向かう。

そして浄土真宗が爆発的に広がる発火点となった町に拠点を置く。越前(福井県)の吉崎(あわら市)に、蓮如がやってきたのは1471(文明3)年、57歳のときだった。吉崎は急速に発展、多くの信者が集まり、一大宗教都市となっていく。いまに続く福井、石川、富山の「真宗王国」の礎となったといえる。

その吉崎を訪ねた

あわら市は人口二万九千人。吉崎地区は230人ほどの小さな町である。ただし、ここには浄土真宗の寺がたくさんある。吉崎御坊跡、真宗大谷派吉崎別院、浄土真宗本願寺派吉崎別院。さらにここには毎年春、「蓮如さん」がやってくる。春の恒例行事「蓮如上人御影道中」という。数十人の門徒たちが4月17日に京都東本願寺を出発、琵琶湖の西岸「湖西回り」で約240キロを歩き通す。滋賀県の天津、高島、福井県の敦賀、越前、福井途中寺々で休み、泊りもする険しい道では厨子を背負って、山中峠や木ノ芽峠(標高628^m)の山越えもあるこれが6泊7日「蓮如さまのお通り」と連呼して4月23日夜吉崎に入る。蓮如忌の法要を行った後5月2日、今度は「湖東回り」で約280キロの「御上洛」の旅に出る。福井県から滋賀県に入り、長浜、米原、近江八幡、草津などを経由して京都に5月9日。こうしてようやく「蓮如さん」のゴールデンウィークが終了する。「御影道中」は江戸時代から延々と続く